

魚住泰広教授に平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞

鹿野豊特任准教授に平成25年度公益財団法人光科学技術研究振興財団研究表彰およびFQXi Essay Contest

山口助教に第3回自然科学研究機構若手研究者賞

魚住泰広教授に平成26年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞

なんだか最近日本語が苦手だ。もうかれこれ50年以上も日本語を唯一の母語として生きてきたのに。日本語や外来語やらでわからないものが多すぎる。いえいえ最近の若者が使っている「やばい（とても肯定的な褒め言葉として）」とか「りょ！（了解の意）」とかだけではなく、そもそも「日本語」を統括しているはずの文科省関係の書類がわからない。なかでも謎の外来語が多すぎやしませんか？「リトリート」「FD」「タスクフォース」などなど「勉強会」「職能開発」「実行小委員会」ではいけないのか？公約がマニフェストになったからって「守られない約束」という本質に変化は無かったし、何のために変な外来語を使うんだろう。そしてとうとう「挑戦的課題提案」なんて言葉が本丸である文部科学省から出てくる始末。日本語の「挑戦的」は本来「challenging」とは同義ではないでしょ？

そのうちこういう雑文も「こちら原稿の方になります」なんて妙チクリン

な言葉を添えて出す日がくるんだろうか……。文部科学省よ、いったい何を狙っているんだ……。

そんなことをつらつらと考えながら文部科学大臣表彰をいただきました。「科学技術賞」というものです。『水中機能性不均一触媒による精密分子変換法の研究』というガチガチの漢字ばかりのタイトルで受賞しました。その内容の主要部分はすべて分子研で、研究所からの大きな支援を得て遂行されたものです。なかでも分子研だけがもつ、真に学問的な意味での自由闊達な空気は（研究費以上に）貴重なものであり、本当に私の研究を支えてくれた大きな力です。

ここに個々の名は記さないものの成果そのものは現在およびこれまでの研究室メンバーの日々の積み重ね、研究所内外の共同研究者の皆様の貢献があればこそであり、今回の受賞は魚住個人の受賞ではなく、研究室に関わる全員への表彰・激励と考えています。み



んな、ありがとう、ご苦労様、おめでとう、やったね！

そして今回の表彰に応募するにあたっては事務センター総務（とくに小野さん！）や大峯所長のご助言・ご助力を賜りました。この場を借りて衷心より御礼申し上げます。

では以上、こちら原稿の方になります。

（魚住 泰広 記）

鹿野豊特任准教授に平成25年度公益財団法人光科学技術研究振興財団研究表彰

このたび、「弱測定理論を用いた光の量子性に関する理論研究」に関する業績で、平成25年度の光科学技術振興財団研究表彰を受賞しました。本表彰は、光科学に関する基礎的な研究又は光科学技術の向上に役立つ研究で独創的な成果を挙げた35歳以下の若手研究者を

対象としており、過去2年以内に発表された研究論文、講演、報告等の内容により対象者を選定します。例年は2名選出されるところが、今年は審査で絞り込むことが出来なかったということで3名選出されました。



写真提供：（公）光科学技術振興財団

本研究業績は、基本的には前所属である東京工業大学大学院理工学研究科基礎物理学専攻に学生として在籍していた頃に始めた「弱測定」と呼ばれる量子測定のアイディアについて、数理的な研究をしていたことに基づくものです。本研究表彰の審査委員長の上村洸先生（東京大学・東京理科大学名誉教授）の講評を聞きながら、私がちょうどこの研究に着手した頃に、弱測定的光を用いた検証実験や量子力学の諸問題への解明に向けた取り組みが世界中で顕著になり始め、ワクワクしながら研究を続けていた日々が、走馬

燈のようによみがえってきました。本研究を指導していただいた当時の指導教員である細谷暁夫氏（東京工業大学名誉教授）、光科学と弱測定の間連を今も一緒に研究している小林弘和氏（高知工科大学システム工学群講師 *Phys. Rev. A* **86**, 053805 (2012); *Phys. Rev. A* **89**, 053816 (2014))、スピンドYNAMIXSとの関連を模索した時期に共同研究を行った田中宗氏（京都大学基礎物理学研究所基研特任助教（湯川フェロー） *Europhys. Lett.* **96**, 40002 (2011))、また「弱測定」のアイディアを着想し、現在では共同

研究者でもあるYakir Aharonov氏（アメリカ・カルフォルニア州Chapman大学教授・Tel Aviv大学名誉教授）をはじめとする多くの関係者に、この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

私が分子研に着任してから2年半が経ち、振り返ってみると、若手独立フェローという新しい制度の中で、何もなかったところに道の一つずつ作りながら翻弄している毎日を送っています。この研究表彰を機に、ワクワクしながら研究していた日々をもう一度取り戻す気持ちで臨もうと思っています。

（鹿野 豊 記）

山口拓実助教に第3回自然科学研究機構若手研究者賞

このたび第3回自然科学研究機構若手研究者賞を受賞し、記念講演をはじめ、素晴らしい経験をさせていただくことができました。本賞のユニークな取組みの一つに、一般の方、特に高校生へ向けた、受賞者による講演が企画されている点があります。今回も、去る6月15日、日本科学未来館にて「宇宙・生命・脳・物質・エネルギー 若手研究者による Rising Sun III」と題した会を開いていただき、国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所をそれぞれ代表する若手研究者とともに、私も講演をさせていただく機会を得ました。当日は（サッカー日本代表の試合があったにも関わらず）、129名の高校生を含む200名以上の一般参加者にお集まりいただき、活気溢れる会となりました。さらに、新たな試みとしてインターネットを通したライブ配信も行われることとなり、研究会や学会での発表や交流とは一味違った体験をすることができました。

実はこの講演会へ向けては、「最先端の学術研究に触れ、科学に対する興味

をより一層持っていただくことを期待し、高校生にも分かり易く講演を行う」というミッションがあり、事前に受賞者同士が顔をあわせての予行練習を重ねてきました。どうしたら高校生にメッセージが伝わるか、会が盛り上がるかと、ざっくばらんに意見を出し合う中で、普段は聞けない研究の細かな点から素朴な疑問、数々の裏話まで聞くことができ、お互いの研究分野を越えてすっかり意気投合することになりました。本番では、それぞれが練上げてきたパフォーマンスに、当人たちが一番楽しんだようにも思います。そうした甲斐もあり、参加された方々には、多岐に渡る自然科学への興味を一層、あるいは新たに感じていただけたのではないかと思いますし、高校生からの予想を上回る活発な質問には、私も大いに刺激を受けました。また、普段なかなか繋がりをもてない異分野の友人を得たことは、何よりの財産となりました。

授賞式直前の様子。講演へ向けて打合せ中の演者たち。



末筆ながら、講演会の開催にご尽力いただいた佐藤機構長、研究力強化推進本部の松山先生や事務の奈良様をはじめ、関係者のみなさまにはあらためて御礼申し上げます。特に、講演会へ向けてマンツーマン指導までしていただいた大峯所長からは多くのアドバイスをいただき、本当にありがとうございました。大変有意義なミッションとなりました。

（山口 拓実 記）